

令和4年度 研修成果（レポート）

研修名 : 令和4年度 国内研修・短期（内地留学）

論文題名 : 「心理職のキャリア形成と力動的アセスメント」
～「心理臨床家のキャリア形成に関する研究ならびに初学者に対する効果的な卒後教育に関する研究」～

職名 : 教授

氏名 : 古田雅明

はじめに

今回「令和4年度 国内研修・短期（内地留学）」において、関西国際大学心理臨床研究所客員研究員として研修を実施したので、以下に、研修成果の報告を行う。

- 1 研修目的
- 2 研修先を選んだ理由
- 3 本学の心理臨床家養成教育と研修者のこれまでの研究活動・教育活動
- 4 心理臨床家のキャリア形成に関する研究
- 5 力動的アセスメントに関する研究
- 6 今後の成果発表の予定
- 7 研修成果の本学教育への還元
- 8 その他 研修期間中の研究活動
- 9 引用文献
- 10 謝辞

1 研修目的

心理臨床家のキャリア形成プロセスの研究により職能の歴史が浅い日本の心理職のキャリアモデルを明確化する。このモデルを見据えた初期教育として学部・大学院教育を位置づけるとともに、修了後の臨床経験も踏まえた力動的アセスメントに関する初学者対象の教育プログラムを開発する。これらの研究の成果を、本学での教育内容に活かすことは勿論、本学を修了した公認心理師・臨床心理士の教育にも活用する。

2 研修先を選んだ理由

関西国際大学は、初年次教育や大学評価に関して我が国の第一人者ともいべき濱名篤学長のリーダーシップの下、全学的に初年次からの手厚い教育実践で有名な大学である。臨床心理士・公認心理師養成課程を有し、実習体験に関するオフキャンパスプログラムを実施するなど積極的な教育実践は見習うべき点が多い。また力動的心理療法の卒業後教育研究を行っている横川滋章教授が実践しているオフキャンパスプログラムは、社会人のリカレント教育を見据えつつ学部生向けに実践しているものであり、その教育ならびに運営方法は、力動的アセスメント教育プログラムだけでなく、研修者の所属専攻の教育を考える上で重要であり、研修機関として最適であると判断した。

3 本学の心理臨床家養成教育と研修者のこれまでの研究活動・教育活動

大妻女子大学大学院人間文化研究科臨床心理学専攻は、18年にわたって実践力のある臨床心理士を養成してきた実績があり、近年は心理職の国家資格である公認心理師養成も同時に行い、たとえば2020年度、2021年度は臨床心理士・公認心理師の現役合格率がいずれも100%であり、2022年度の公認心理師国家試験も現役合格率100%を維持するなど(2022年度の臨床心理士資格試験は11月12日～14日に2次面接試験実施予定)、全国平均の合格率を大きく上回っており大学院生のダブル資格取得に一定の成果を挙げてきたといえる(参考:2022年度公認心理師国家試験合格率48.3% 2021年度臨床心理士資格試験合格率65.4%)。

筆者も2005年に本学心理相談センターの専任の臨床心理士(助手)として勤務するようになってから、臨床心理士・公認心理師の養成初期教育に関与し17年目となっている。

ところで、本学が臨床心理士・公認心理師の高い合格率を維持しているのは、臨床教

育の中核として、長期間にわたる 1 対 1 の個人心理療法の実習とスーパーヴィジョン（教員による院生に対する臨床指導）と、ロールシャッハ・テストに代表される投映検査法を中心とする心理アセスメントを 2 本柱としてきたからである。

とりわけ長期間の個人心理療法を実践する心理臨床家は、自分自身が心理療法の道具と言われているため、筆者はこれまでに心理臨床家の成長と業績の関係に関し、特に精神分析家の生い立ちと臨床理論の照合に関する研究と教育を行って来た（古田, 2015; 古田・香月, 2016）。

また、心理臨床家を目指す大学院生の学内外の臨床心理実習の教育方法や教育効果に関し量的、質的研究を過去数年にわたって行って来た（古田・加藤・森本, 2015; 古田・栗田・中田, 2019）。

これらの教育実践研究と同時に、現場で実績のある心理臨床家が大学院生の時期にどのように学び、修了後どのようなキャリアを経てきたのかについて、成功体験と失敗体験の双方の視点からの学びを中心にキャリア形成プロセスの研究してきた（古田・香月・八・堀・加藤・西河・福島, 2013; 古田・香月・児玉・齊藤・西河, 2015）。

この初期教育とキャリア形成、それぞれの研究成果を論文や書籍として公刊したり、日本心理臨床学会のシンポジウムで話題提供したり（日本心理臨床学会広報委員会企画シンポジウム, 2016）、あるいは所属している大学院においてシンポジウムを開催するなど内外に積極的に発言してきた（大妻女子大学心理相談センター, 2018）。

さらに 2019 年度から 2020 年度は本学の戦略的個人研究の助成金、2020 年度から 2022 年度は公益財団法人精神分析武田こころの健康財団の研究助成金（すべて研究代表者）を得て、他大学の研究者とも連携して研究を進めている。

筆者は研究成果を日々の学部教育や大学院実習指導教育へと還元させることを通じて、研究成果を教育に、教育実践の課題を研究にと円環的に活用することを目指してきたとまとめられるだろう。

それでは次に、心理臨床家のキャリア形成に関する研究と、このキャリア形成の際に職能の中核となる心理療法と心理アセスメントの力量形成に影響する、力動的心理アセスメントに関する研究について報告する。

4 心理臨床家のキャリア形成に関する研究

研究の背景 ～公認心理師の誕生と卒後研修プログラムの必要性～

国民の心の健康への支援を目標に公認心理師法が 2017 年 9 月に施行され、2022 年 9 月末時点で 57,645 人が公認心理師として登録するに至った。

国家資格の質を担保するものが初期の養成教育であることは論を待たない。そのため公認心理師法（平成 27 年法律第 68 号）第 7 条第 1 号及び第 2 号に規定する「公認心理師となるために必要な科目」が定められており、資格取得に最低限必要な初期教育のプログラムが整ったといえる。とはいえ資格取得は一定水準の専門技能を臨床実践において活用できることとイコールではない。公認心理師が国民の心の健康の保持、増進に寄与できるかどうかは充実した卒後研修を受けて専門性を高めることにかかっている。

この点について民間資格として臨床現場での実績と知名度のある臨床心理士は、資格の 5 年更新制度を導入し、卒後研修プログラム（リカレント教育）を必須として質の担保を試みてきた。一方、公認心理師は資格更新制度がなく、卒後研修は必須ではない。

以上のことから筆者は、公認心理師を対象とした卒後研修プログラムの開発が急務であり、この責を担うのが養成大学院のリカレント教育であると考えてきた。しかしながら、心の問題への支援という、個別性が高くマニュアル的支援に馴染まない専門技能について、いかなる卒後研修プログラムを準備するかは大変難しい課題でもある。

心理専門職の専門技能とキャリア形成

専門技能の中核である心理療法や特に投映法も含む心理アセスメントは、エビデンス化に馴染むように数量化や可視化することが困難な職人的技能の面も多い。そして専門職アイデンティティは公認心理師として自立するため重要であるが、臨床経験に加え、例えば結婚や出産・育児、死別体験といった私生活の影響を受けて発達すること、つまり専門性と私生活が切り離せず相補的關係にあると言われてきた (Skovholt & Rønnestad, 1995)。とりわけ日本における女性は、妊娠、出産、育児、パートナーの転勤、両親の介護といったライフイベントがキャリア形成に広範囲に深く影響を与えており、女性の心理臨床家のキャリア形成もその例外ではない。そして女性の心理臨床家を養成している本学にとっても、女性心理臨床家の生涯にわたるキャリア形成プロセスを見据えた養成教育とリカレント教育の充実が重要ではないだろうか。

しかしながら日本における臨床心理士や公認心理師といった心理臨床家は、まだ専門職としての歴史が浅く、また雇用が不安定な非常勤職も多いので、初学者にとって専門職アイデンティティの形成につながるキャリアモデルも専門技能とキャリア形成のプロセスの関係性も不明確な現状にある。

伝統的には、心理療法や心理アセスメントの卒後研修として熟練者によるスーパーヴィジョンという個別教育が行われてきており、また私生活と切り離せないナラティブな領域の専門性向上のために心理臨床家自身が心理療法を受ける教育分析も行われてきた。多くの先行研究はその教育効果の高さと、スーパーヴィジョンなどが専門性の発達に繋がることを示している(古田・香月ほか, 2013;2015)。

筆者らの先行研究

筆者らが行って来た初学者を対象とした過去数年のキャリア形成に関する研究からは、初学者が心理臨床家の資格取得を目指した時から、大学院教育を経て有資格者になるプロセスにおいて、①大学院進学葛藤段階(就職せずに進学することへの躊躇や適性への不安)、②心理臨床の現場での葛藤の段階(ケース担当の困難さや大学院教育とのズレによるリアリティショック)を経ていた。そして資格取得後は、職業的に不安定だとしても③心理臨床の楽しさが勝る段階を経て、臨床経験5年目前後に④専門職アイデンティティ確立の段階を迎えると共に、結婚、出産、育児を優先するか、専門職としてのキャリア形成を優先するかといった、⑤私生活の葛藤が浮上する段階を示してきた(香月・古田・児玉・齊藤・西河, 2017)。

このプロセスにおいて収入に対して研修費負担が大きすぎる問題があり、伝統的な個別教育はいずれも費用が高く研修が最も必要とされる初学者が研修を受けられない事態が明らかとなった。さらに個別教育を担当する熟練者は、現行の養成教育を受けている初学者と教育背景が大きく異なるので、初学者の身近なキャリアモデルとはなりにくい。

一方で、学会や職能団体が実施する大規模な卒後研修プログラムは、伝統的個別教育よりは多くの初学者がアクセスしやすく、保健医療・教育・福祉といった分野の特性、精神疾患や発達障害といった要支援者の特性を理解するための専門知識の伝達に優れてはいる。しかし私生活と不可分な専門技能の中核を扱えないという課題がある。そのため、養成大学院によるきめ細やかで一人ひとりの個性にも配慮した卒後研修プログ

ラムのニーズが高いのである。

筆者が現在行っている種々の研究の最終的な目的は、公認心理師・臨床心理士の専門技能の質を向上させるために養成大学院が実施するリカレント教育としての卒後研修プログラムの開発である。とりわけ心理療法と心理アセスメントといった可視化や数量化に馴染みにくい中核的な専門技能の向上のために、受講生の私生活と専門性が重複する領域に焦点を当て、きめ細やかで受講生の個性にも配慮したキャリア支援を通じて、実践力のある専門職を輩出することである。

国内研修中や研究の概要

さて、今回の国内研修では、先述の筆者らの研究の延長として心理臨床家のキャリア形成における好例研究として、周囲から実践力があると認められている中堅以上の心理臨床家を対象としたインタビュー調査の質的研究を行った。以下に研究方法の概要と主な結果を示す。

1) 研究方法の概要

調査対象者

研究対象者は、縁故法により大学の臨床心理学の教員、精神科医等などから心理臨床の実践力があると認められた中堅の臨床心理士・公認心理師 10 名（女性 5 名、男性 5 名）から協力を得た。調査協力者の年齢は平均 40.5 歳 ($SD=4.4$) であった。なお、大学院修士課程修了後の臨床経験年数は平均 14.6 年 ($SD=4.2$) であった。勤務形態は常勤職が 7 名（内 5 名は非常勤と掛け持ち）、非常勤職が 3 名であった。主な職域、勤務業務内容、拠って立つ臨床理論など、調査協力者のプロフィールを示す（表 1）。

調査方法

調査期間：2020 年 1 月から 2020 年 3 月

調査場所：大学の研究室あるいは調査協力者の勤務先の面接室

調査手続きと倫理的配慮：調査に先立ち調査協力者に対し書類を郵送し、本研究の目的、実施内容および方法、実施に伴う危険性、不利益、実施費用の調査者による負担、結果発表の方法、およびプライバシーの保護、研究に不参加の場合でも不利益が生じないこと、また、同意後の撤回がいつでも可能であること、調査に協力した場合、相応の謝金

があることなどを書面で説明した。あわせて、調査協力が可能な場合に、属性等を問うフェースシートに記入を求めた。またインタビュー実施前に口頭でも同様の説明をする等のインフォームド・コンセントを行った。その上で、書面により研究同意を得たものを調査対象とした。

次に、調査内容の項目を目安に半構造化面接を行った。発言内容は同意を得てICレコーダーに録音し、インタビュー中は、話しやすい雰囲気を維持することに努め、調査者が発言を要約し、適宜質問を行った。インタビューの所用時間は平均 64 分 (49-73 分) であった。終了したところで、インタビューの感想や質問を受け付け、体験を共有する時間を取った。後日逐語記録を作成し分析データとして使用した。

なお、調査は大妻女子大学生命科学研究倫理委員会の承認を得て行った (受付番号 2019-025)。

表 1 調査協力者のプロフィール

性別	年代	経験	主な職域	勤務形態	主な業務内容	臨床理論
1 男性	40代	17	精神科病院・精神科診療所・私設心理相談	常勤+非常勤	心理療法・査定	分析心理学的アプローチ
2 男性	40代	19	学生相談・精神科診療所	常勤+非常勤	心理療法・査定	分析心理学的アプローチ
3 女性	40代	21	精神科病院・精神科診療所	常勤+非常勤	心理療法・査定	分析心理学的アプローチ
4 男性	30代	9	精神科診療所・私設心理相談・スクールカウンセリング	非常勤	心理療法・査定・コンサルテーション	分析心理学的アプローチ
5 女性	30代	13	大学心理学科・大学病院	常勤+非常勤	教育・研究・心理療法	行動療法的・認知行動療法的アプローチ
6 男性	30代	13	大学心理学科・スクールカウンセリング	常勤+非常勤	教育・研究・コンサルテーション	分析心理学的アプローチ
7 男性	40代	15	精神科診療所	常勤	心理療法・査定・コンサルテーション・グループアプローチ	折衷的・統合的アプローチ
8 女性	40代	15	大学院付属相談室	非常勤	心理療法・教育	分析心理学的アプローチ
9 女性	30代	13	精神科診療所・総合病院・発達センター	非常勤	心理療法・査定・療育	分析心理学的アプローチ
10 女性	30代	12	総合病院	常勤	心理療法・査定・グループアプローチ	行動療法的・認知行動療法的アプローチ

調査内容

インタビューでは、①臨床心理士を目指そうと思った時期と当時の職業イメージ、②大学院在籍時の進路希望、③大学院時代の学内外の臨床心理実習と臨床教育、修士論文研究指導、④最初の職場を選んだ経緯、⑤職場選択と大学院教育の関係性、⑥2 番目以降の職場選択の経緯、⑦職場でのケース担当に関する困難と困難への対応、⑧職場でのケース担当以外の業務に関する困難と困難への対応、⑨心理専門職として職業的に自覚した時期と経験、⑩今後のキャリア計画について尋ねた。

分析方法

インタビューで得られた逐語記録は、質的研究法の一つでプロセスの分析に優れる修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTA)の概念生成の方法により分析された。まず、分析テーマを「大学院修了から中堅として周囲に認められるようになるキャリア形成のプロセス」と設定した。分析焦点者を「中堅の心理臨床家で、大学の臨床心理学の教員や精神科医などから、実践力があると認められている心理臨床家」と設定した。

分析は逐語記録を繰り返し読み、各調査協力者の発言内容を把握し、最もバリエーションの豊富な内容を語った者を1例目の分析焦点者として設定した。次に、上述の分析テーマと関連する発言内容を検討し、データの背景にある意味を読み取るように解釈を行い、データを説明できる概念を生成した。概念は分析ワークシートにまとめられ、順次、分析焦点者を移し、先に生成した概念との類似点、対極例を検討しながら必要に応じて新たな概念を生成した。さらに、概念間の関係性を検討、吟味した上で複数の概念からなるサブカテゴリーやカテゴリーを生成した。最後に、カテゴリー間の相互関係から結果をまとめ、その概要を文章化(ストーリーライン)し、結果図を作成した。

分析の確証性を確保すべく、分析の途中で適宜、臨床心理学の専門家や質的研究の専門家にスーパーヴィジョンを受けた。

結果

M-GTA による分析結果

M-GTA により分析した結果、3つのコア・カテゴリー、6つのサブカテゴリーと25の概念が生成され、その関係が空間配置された(表2、図1)。

表 2 生成された概念

コア・カテゴリー	サブカテゴリー	概念
<心理療法にこだわる>	「専門の軸を定める」	【心理療法が中軸】
		【軸周りの拡大】
		【複数の軸による安定化】
<人の縁で働く>	「キャリアモデル」	【身近な人がモデル】
		【身近なモデルの不在】
	「専門合わせの職場選択」	【いただいた話に身を任せる】
		【研鑽のための精神科】
		【心理療法ができる職場を優先】
		【あれもこれもやってみよう】
	「支えを持つ」	【職場都合の退職】
		【相談できる同僚】
		【スーパービジョンの継続】
		【大学院との繋がり】
<公私浸透>	「生活合わせの職場選択」	【内なる声との対話】
		【安定追求】
		【収入アップ】
		【プライベート都合の退職】
	「専門家意識の形成」	【立ち止まって考える】
		【資格取得は関係ない】
		【苦しいケース体験】
		【楽しいから続けられる】
		【まだ道半ば】
		【クライアントの反応】
		【臨床経験がプライベートで生きる】
		【プライベート経験を臨床に活かす】

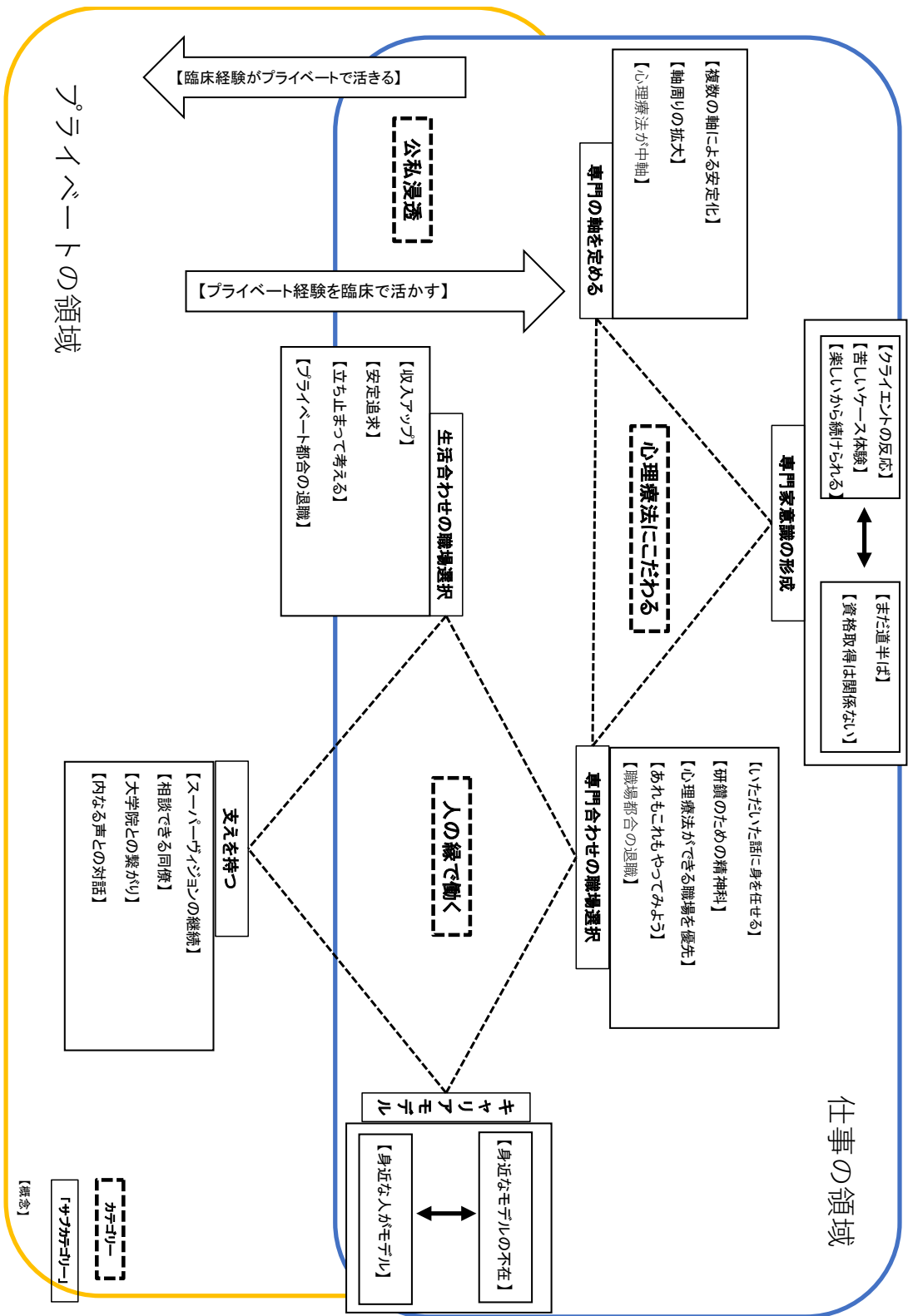


図1 結果図

2) 研究のまとめ

本研究の詳細は、大妻女子大学人間生活文化研究に投稿予定であるが、中堅として周囲から実践力が認められている心理臨床家は、専門性の中核として心理療法を実践し続けており、キャリア形成の際にも心理療法が継続できる職場環境にあることを軸に職場選択をしていた。また心理療法の質の担保のためにスーパーヴィジョンを受け続けるだけでなく、さらに、卒後も長い間、大学院の教員との繋がりを維持するなど心理臨床家同士の人の縁を維持しながらキャリア形成をしている特徴が認められた。また心理アセスメント能力の向上が心理臨床家としての職業アイデンティティの形成に影響を与えていることが考察された。

以上のことから、心理療法の基礎となる心理アセスメント、とりわけ、長期の個人心理療法の展開を予測しうる力動的アセスメントの初期教育ならびにリカレント教育の重要性が改めて確認された。

次に力動的アセスメントに関する研究について報告する。

5 力動的アセスメントに関する研究

力動的アセスメントについて

効果的な心理療法実践のためには適切な心理アセスメントが不可欠である。力動的アセスメントは、フロイトの精神分析以来、歴史的に多くの心理療法理論の土台となってきた適切なアセスメントの中核といえる。力動的アセスメントとは、クライアントが抱えている問題・症状・悩みについて、本人自身も意識しない動機や意図が関与していると考え、その意味をクライアントの内面、対人関係、クライアントを取り巻く環境といった様々な要因の相互の力動的関係から検討するものである。この力動的アセスメントの結果は効果的な心理療法の指針となる。

力動的アセスメントの研究は、国内外ともに心理療法の事例研究を通じて行われてきた (Nancy McWilliams, 1999/2006; 菊地, 2015; 清水, 2018; 吾妻, 2018)。またその教育はスーパーヴィジョンという経験則に準拠した個人指導が主体である。つまり力動的アセスメントの習得には心理療法の事例担当とスーパーヴィジョンが必要とされ、その教育は大学院修士課程に加え、卒後教育も含め長い期間がかかる。多くの初学者は、指定大学院修士課程修了後1年目の秋に臨床心理士資格試験があるため、現場に出た1

年目は大学院教育から離れてしまい、スーパーヴィジョンを受けることができないまましかも無資格の状態でも心理療法を担当し続ける事態も生じている。

筆者らのこれまでの取り組み

筆者らはこれまでに臨床心理士指定大学院を修了したばかりの初学者を対象にした卒業後教育として、初学者であっても臨床現場で通用するレベルの心理検査の所見が書けるように、ロールシャッハ・テストのベテランによる解釈の思考過程を質的に分析し、その結果をもとにロールシャッハ・テストをスモール・ステップ化して教育するプログラムを開発してきた（加藤・森本・古田・乾，2013）また、力動的継起分析の第一人者と初学者の思考過程を比較検討する研究を行い、初学者特有の力量形成の課題を探ってきた（加藤・森本・古田・井上，2017;2018）。ロールシャッハ・テストの継起分析（馬場，2017）とは、個人心理療法におけるクライエントの心理的な抵抗感やクライエントの対人関係の様相、さらに心理臨床家とクライエントの間に生じる面接内の人間関係、に対する予測性がある分析方法である。よってロールシャッハ・テストの継起分析を用いた所見が、心理療法のための力動的アセスメントとして有効である。

しかしながら、スクールカウンセラーのようにロールシャッハ・テストを実施しにくい臨床現場で働く心理臨床家も多く、その場合、面接や行動観察による力動的アセスメントが中心とならざるを得ない。それでは、初学者であっても心理療法の方針を検討するために必要なレベルの力動的アセスメントが可能になるにはどうすれば良いのだろうか。

研究テーマ

これらの問題を解決するために筆者らは、①～③の研究に取り組んできた。

- ① 面接や行動観察による力動的アセスメントを実践してきたベテランの精神分析家¹はアセスメントの過程で、何に注目していかにアセスメントしているのか、
- ② 力動的アセスメントの過程のどこで何に初学者の困難が生じるのか、
- ③ 中堅の心理臨床家と比べ初学者の心理アセスメントはどのような特徴があるのか。

¹ 国際精神分析協会が認定する精神分析の有資格者のこと

①に関してはとして既に発表しており（古田・森本・加藤・井上・下平 2021；古田・森本・加藤・井上・下平・橋爪, 2021）、その他の研究成果をもまとめた形で力動的アセスメントに関する実践的なテキストとして 2023 年 4 月頃に創元社から出版予定となっている。

今回の国内研修期間は、主に②に関連してこれまでに収集してきたデータの分析を行うと共に、③の研究のデータ収集を行った。次に②力動的アセスメントの過程のどこで何に初学者の困難が生じるのか、に関する研究の概要について報告する。

1) 研究方法の概要

調査協力者：縁故法により臨床心理士・公認心理師養成課程を有する大学院修了後 2 年未満の初学者 30 名の協力を得た（女性 26 名/男性 4 名；平均 28.3 歳 $SD=8.7$ ）。

調査期間：2021 年 2 月～2022 年 3 月

調査手続き：筆者らが作成した想定事例の初回面接場面を書面で提示し、ランダムに 2 グループ分けした調査協力者にアセスメントを実施してもらった。想定事例は筆者らが作成した青年期女性の初回面接記録であった。本事例作成の際にカーンバーグの病態水準論²における境界パーソナリティ構造（Borderline Personality Organization higher level）となるよう精神分析家の指導を受けた。第 1 グループには筆者らがこれまでに使用してきた力動的アセスメントのための講義ノートと 3 種のワークシートの使い方を書面で教示し、手順に沿って力動的アセスメントを行ってもらった（16 名）。第 2 グループには、調査協力者が普段行っている方法で自由にアセスメントを行ってもらった（14 名）。なお、臨床現場の実情にあわせ想定事例を読んでから 1 週間以内にアセスメントするよう依頼した。当初対面調査を予定していたが、COVID-19 の影響により全て郵送方式で実施した。

倫理的配慮：大妻女子大学生命科学研究倫理委員会の承認を受け実施した（受付番号：02-018）。

² 病態水準とは、精神状態を正常な水準か、神経症水準か、精神病水準、あるいは神経症と精神病の間にある境界水準かを区別するアセスメントの視点である。

分析対象：第1グループ16名の3種のワークシートおよび両グループ30名のアセスメント結果報告書のテキストデータを分析対象とした。

分析方法：調査協力者が実施した想定事例に対する評価と、筆者らが想定事例として設定していた評価基準を比較した。比較項目は以下の①～③であった。第1グループ16名の①評価ワークシートの評価項目（1 知的能力 2 現実検討力 3 感情の調整 4 対象関係 5 アイデンティティ）³および②ケースフォーミュレーションワークシートの病態水準。両グループ30名の③アセスメント結果報告書に記載された病態水準。

2) 結果の概要

調査協力者の属性：修士2年在籍中が13名、修了生が17名であった。大学院修了後の平均臨床経験は9.2カ月（ $SD=9.2$ ）であった。心理療法で用いる技法（オリエンテーション）は「精神分析的」が50.0%と最多で、ついで「折衷・統合的」と「人間性心理学的」が13.3%と続いた。修了生の臨床領域（複数回答）は医療58.8%、教育52.9%、福祉35.3%だった。

主な分析結果：第1グループの評価と筆者らの設定基準との一致率を表1に示した。知的能力と対象関係の評価は一致率が87.5%ある一方、アイデンティティは18.8%に留まった。次に評価ワークシートの結果を元に判定するケースフォーミュレーションワークシートにおける病態水準（設定基準はBPO higher level）との一致率は68.8%であった。しかし評価ワークシートとケースフォーミュレーションワークシートを用いた後に記述するアセスメント結果報告書において病態水準に言及した人は50.0%に留まった。一方、普段行っている方法でアセスメントした第2グループでは、結果報告書で病態水準に言及した人は28.6%であり、BPO higher levelと判定した人はいなかった。

³ 次ページの表1に項目の説明が記載されている。なお現実検討力とは外界の現実を正しく認識したり、自分の心の内面で起きていることを外的現実と混同しない自我境界機能などを含む概念である。

表1 評価ワークシートにおける評価基準とAグループの評価との一致率

評価項目	想定事例の設定基準	一致率
1 知的能力	平均 言語能力・実行能力（課題達成に向けた計画性や遂行能力）・状況判断力がおおそ平均的で、置かれた状況の把握や対応におおよそ問題ない	87.5%
2 現実検討力	±～干 自我境界機能は保たれているが自己行動に関する判断力が一時的に機能しないことが起こりやすい	62.5%
3 感情の調整	干 感情を自覚し、それらを状況・条件に応じて適切に抑え込むなど調整し、そのことを自覚する機能が不安定	75.0%
4 対象関係	干 他者との関係において、適切な距離を保ちながら相互交流的に関わり、柔軟に対応し、一貫した関わりを保つ機能が不安定	87.5%
5 アイデンティティ	± 自分の内面に食い違った感情を見つけたり、自分とは違う価値観と出合ったりしても、一貫した自分らしさを感じ、社会への所属感や社会的な役割意識を抱く機能がおおよそ保たれている	18.8%

3) 研究のまとめ

両グループの結果の比較ならびに第1グループの各種ワークシートの分析結果から、筆者らの作成した講義ノートと3種のワークシートによるスモール・ステップ式教育方法により、初学者がクライアントの自我機能の評価と病態水準の判定をおおよそ適切に行えるようになることが示された。一方で、第1グループであってもアセスメント結果報告書に病態水準を記載していない例があり、第2グループの結果報告書での病態水準への言及の少なさも考慮すると、面接関係の展開の予測につながる病態水準のアセスメントが初学者に浸透していないことが示唆された。また評価ワークシート項目のアイデンティティへの理解を深めることが初学者には難しかったと言えるだろう。

今後はさらに第1グループと第2グループのアセスメント結果を質的に検討すると共に、調査協力者を増やすことで両群の自我機能の評価と病態水準の判定の差を統計的に検討する必要があるだろう。さらに、中堅の心理臨床家による力動的アセスメントと初学者との比較により、初学者が躓きやすいポイントを整理することで、力動的アセスメントの教育プログラムを精緻化していく必要がある。

今回のデータ分析以外に、力動的アセスメントに関する国内外の文献研究を行っており、力動的アセスメントの諸研究における評価項目、特に自我機能の評価と、筆者らの力動的アセスメントにおける評価項目の比較検討を行っている。

以上が国内研修中にデータ分析を行った結果の概要である。

6 今後の成果発表の予定

ここまでに主に国内研修中の研究結果の概要を示してきたが、今後はこれらの成果を発表する予定である。まず、心理臨床家のキャリア形成に関する研究は2023年度の日本心理臨床学会第42回大会および本学人間生活文化研究等において発表を予定している。次に力動的アセスメントに関する研究は、創元社より今年度中に出版予定となっており（乾吉佑監修 加藤佑昌・森本麻穂編著 古田雅明・橋爪龍太郎著（印刷中） 力動的的心理アセスメントワークブック 創元社）、また関連の論文を本学人間生活文化研究や人間関係学研究等にて発表予定である。

7 研修成果の本学教育への還元

今回の研修成果は、現在、学部教育、大学院教育、大学院修了後のリカレント教育へと還元しており、今後もさらに担当科目の教育へと反映させて行く予定である。

学部教育では、社会・臨床心理学専攻の公認心理師養成コア科目である「心理演習」「心理実習」が還元の対象となる。具体的には現在、筆者が担当している心理演習において、想定事例のアセスメントを実施しているが、その際に力動的アセスメントの基礎を伝えている。今後、春休み期間に集中講義として実施される心理実習においても同様に還元する。

また大学院臨床心理学専攻では、必修科目「臨床心理実習（心理実践実習）」「臨床心理学特論」「臨床心理査定演習Ⅱ」等において、心理臨床家のキャリア形成を踏まえた実習演習指導を行う。

さらに大学院修了者（心理相談センターの研究員や相談協力員）に対しては、リカレント教育としてさらに実践的な力動的アセスメントの臨床指導を行っている。また、12月初旬には修了生を対象とした小規模の研修会を実施する予定となっている。

今回の研修内容は、学部から大学院、公認心理師・臨床心理士の資格取得に至る長期臨床教育のさらなる発展へにつながる可能性があり、その成果としてのダブル資格の合格率が、将来的に高校生の志願者確保へとつながると考えられるので、今後も学院全体に一定程度の貢献ができると考えている。

8 その他 研修期間中の研究活動

その他、国内研修期間中に行った研究活動（①～③）を以下に示す。

① 力動的アセスメントで用いられることの多いロールシャッハ・テストの継起分析による心理療法の効果測定に関する事例研究を行ったものである。国際ロールシャッハ学会で口頭発表した。筆者は、共同研究者として継起分析とプレゼンテーションの準備に関与した。

Yusuke Kato, Nanako Katsuki, Seiji Mabuchi, Masaaki Furuta, Misuzu Inoue (2022) CHANGES IN A COMPULSIVE WOMAN THROUGH HER PSYCHOTHERAPY AS SEEN FROM DIFFERENCES IN RORSCHACH TEST XXIII Congress of the International society for the Rorschach and Projective Methods, Abstract Book p74

② 専修大学心理教育相談室（大妻女子大学における心理相談センターと同種の学内実習施設）において大学院生が担当した臨床心理実習における事例研究に対して、力動的アセスメントの視点からコメントを行った。

古田雅明（2022）初心セラピストとベテランクライアントと学内実習施設と ～山崎論文へのコメント～専修大学心理教育相談室年報 28, 57-59.

③ 本学修了生（臨床心理士・公認心理師）が修士論文研究を再分析し、日本心理臨床学会で発表する際の指導を行った。

佐藤知香・古田雅明（2022）周産期の喪失を経験した母親へのケア－助産師の困難と支援者支援の可能性－日本心理臨床学会第41回大会 オンライン

9 引用文献

- 吾妻壮 (2018). 精神分析的アプローチの理解と実践—アセスメントから介入の技術まで 岩崎学術出版社 63-85.
- 馬場禮子 (2017) 力動的心理査定—ロールシャッハ法の継起分析を中心に 岩崎学術出版社
- 古田雅明・香月菜々子・八城薫・堀洋元・加藤美智子・西河正行・福島哲夫 (2013) 臨床心理士のキャリア形成に関する基礎研究 (1) —修了生のアンケートから— 大妻女子大学心理相談センター紀要, 9・10, 10 周年記念特別号 11-23.
- 古田雅明 (2015) タスティン/フェアバーン 乾吉佑監修 横川滋章・橋爪龍太郎編著 生い立ちと業績から学ぶ精神分析入門-22 人のフロイトの後継者たち- 創元社 158-168. 193-202.
- 古田雅明・香月菜々子・児玉成未・齊藤圭・西河正行 (2015) 臨床心理士のキャリア形成に関する基礎研究(2) —インタビュー調査の質的検討— 大妻女子大学心理相談センター紀要 12, 1-14.
- 古田雅明・加藤佑昌・森本麻穂 (2015) 医療領域における臨床心理実習の多面的評価方法に関する研究 大妻女子大学人間生活文化研究 26, 31-36.
- 古田雅明・香月菜々子 (2016) 学内実習施設における受付実習の位置づけと実習の目標 大妻女子大学心理相談センター紀要 13, 19-26.
- 古田雅明 (2019) カウンセラーとして働く 尾久裕紀・福島哲夫編著 カウンセラーになる —心理専門職の世界—日本経済評論社 45-60.
- 古田雅明・中田香奈子・栗田麻美 (2019) 精神科臨床心理実習における教育目標と実習生の学び —実習記録のテキストマイニングから— 大妻女子大学人間生活文化研究 29, 791-798.
- 古田雅明・森本麻穂・加藤佑昌・井上美鈴・下平憲子 (2021) 心理アセスメントにおける初学者の特徴 -力動的ケースフォーミュレーションのためのアセスメントツールの開発- 日本心理学会第 85 回大会(オンライン)
- 古田雅明・森本麻穂・加藤佑昌・井上美鈴・下平憲子・橋爪龍太郎 (2022) 力動的アセスメントに関する修了後教育の実践 大妻女子大学人間関係学研究, 23, 31-40.
- 加藤佑昌・森本麻穂・古田雅明・乾吉佑 (2013) ロールシャッハ・テストに関するスモール・ステップ式教育方法の検討 専修人間科学論集. 心理学篇 3, 23-31.

- 加藤佑昌・森本麻穂・古田雅明・井上美鈴 (2017) 精神力動的継起分析における思考プロセス -ロールシャッハの初学者教育の探索的研究- 日本ロールシャッハ学会第21回大会
- 加藤佑昌・森本麻穂・古田雅明・井上美鈴 (2018) 精神力動的継起分析における初学者の思考プロセスの特徴 -ロールシャッハの初学者教育の探索的研究(2)- 日本ロールシャッハ学会第22回大会
- 香月菜々子・古田雅明・児玉成未・齊藤圭・西河正行 (2017) 臨床心理士のキャリア形成に関する基礎研究 3 -グループインタビューの内容分析- 日本心理臨床学会第36回大会
- 菊地孝則 (2015). 精神分析的臨床を構成するもの -精神分析的アセスメント 精神分析研究, 59, 27-39.
- 森本麻穂・井上美鈴・古田雅明・下平憲子・加藤佑昌 (2013) 「ケースとの出会い方」を学ぶ 乾吉佑編 心理臨床家の成長, 金剛出版. 11-33.
- Nancy McWilliams (1999). Psychoanalytic Case Formulation 成田善弘監訳 ケースの見方・考え方 創元社
- 日本心理臨床学会広報委員会企画シンポジウム (2016) 心理臨床家の成長とは 日本心理臨床学会第35回秋季大会 話題提供者: 内海裕祐・津田真知子・徳田仁子・古田雅明・谷田征子 指定討論者: 北山修・長谷川啓三・平野学
- 西河正行・八城薫・向井敦子・古田雅明・香月菜々子 (2015) 心理学教育を通じた社会人基礎力の育成 大妻女子大学人間生活文化研究, 25, 1-14.
- 大妻女子大学心理相談センター (2018) 若手が語る心理臨床のリアリティ -医療・教育・福祉の現場から- 大妻女子大学心理相談センター紀要, 15, 5-42.
- 清水右子 (2018). 精神分析的実践の最初期をめぐって -アセスメント面接における心的交流の最初期という視点 精神分析研究, 62, 139-150.
- Skovholt, T.M., & Rønnestad, M.H. (1995). The evolving professional self: Stages and themes in therapist and counselor development. Chichester, West Sussex, UK: Wiley.

10 謝辞

おかげさまをもちまして、今年度前期に「令和4年度 国内研修・短期（内地留学）」をお認めいただき、半年間、関西国際大学心理臨床研究所客員研究員として研究をすることができました。コロナ禍の影響もありましたが、指導教授の関西国際大学の横川滋章教授にご指導を受けることができ、また、先生が主催している同大オフキャンパスプログラムに参加することもできました。

さらに私の大学院時代からの恩師である専修大学名誉教授の乾吉佑先生にも研究の相談を定期的にお問い合わせすることができました。

個人的に非常に充実した満足のいく時間を過ごすことができました。改めてご指導くださいました両先生に感謝申し上げますとともに、研究に協力して下さった心理臨床家の皆様、またこのような機会をお認めいただいた大妻女子大学に感謝申し上げます。

以上

研修先　：関西国際大学心理学部心理学科/関西国際大学心理臨床研究所

研修期間：2022年4月1日～2022年9月14日

指導教授名：横川滋章先生

2022年11月12日提出

大妻女子大学 人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻
教授 古田雅明